

初代笠亭仙果年譜稿——その一——

石 川 了

本稿は、幕末の戯作者であり国学者でもあった初代笠亭仙果こと高橋広道の生涯を調査し整理したものである。仙果についての基礎的事項についてはすでに報告したので、ここではそれらを踏まえて、徒に煩雑になるのを避け簡略に記すことを第一としたが、典拠はできる限り明示した。本文中の▲印は伝記事項、○印（写本）◎印（刊本）は文筆文学事項、※印は関連事項の印である。戯作特に合巻の刊年は表紙または見返しの記載を第一とし、これがない場合のみ序文等に従うこととした。序文がある場合は、その年次等と筆者をすべての作品について記した。調査上の不備のために不十分な点も多いと思うが、一まずその生涯を概観することはできると思う。

仙果研究に当っては、特にその当初から長友千代治氏、中野三敏氏、若木太一氏の御指導を得た。また鈴木重三氏には貴重な御蔵書を閲覧させていただき、森銑三氏と市橋鐸氏からは御教示のみならず、両氏の諸論文からも多くの恩恵を得た。さらにまた長谷川強氏からは御所蔵の多くの古書目録をお借りすることができた。ここに記して御礼申し上げたい。

文化元年 甲子 一歳

▲十月十七日 尾張国熱田中瀬町に生まれる。

天保四年四月執筆の『よしなし言』五編に、自伝歌ともいうべ

きもの（以後「自伝歌」という）が記されており、そこに「国尾州所は熱田中瀬町東側にてあぢな家なり」とあり、また「誕生は十月中の七日にて文化元年甲子のとし」とある。さらに菩提寺である成福寺過去帳を見るに、代々中瀬町に住んでいるので同所にて出生と考えたい。仙果について記述のある当時の資料としては、他に①『戯作者小伝』、細野要齋の②『感興漫筆』第三十七巻、仮名垣魯文の③『稗史年代記』等があり、それらをまとめると次のようになる。氏は源（④）、姓は大宅（⑤）、族を高橋、屋号を橘屋（「自伝歌」⑥）という。代々尾州熱田に住んで三代熱田大神宮領の里正（⑦）であった。曹洞宗成福寺を菩提寺とし、丸に橘が家紋（「自伝歌」）である。名前は初め政房（⑧）、後広道（⑨）と改めた。幼名亀三郎（⑩）、通称を弥太郎（「自伝歌」⑪⑫⑬）、字を子由（「自伝歌」⑭）という。号して笠亭仙果（⑮）、合一癡房、古今堂千歌、倉鼠松羅居士（「自伝歌」）、轍斎、狗々山人（⑯）、松緑翁（⑰）等という。また『題作文稿』には桃の舎、国会図書館蔵『同行百人一宿大土佐草』稿本には合一堂の号がみえ、小寺玉晃の『歳月録』によれば、玉覧という画号もあるという。戯作関係では笠亭仙果から一時柳亭種秀と改号して後二代目柳亭種彦を継ぎ、狂歌の方面では四世浅草庵を襲名する（後

述)。蔵書印は「このぬし／せんくわ」と「高橋蔵書」(朝倉治彦氏編『蔵書名印譜』)が著名であるが、他に「合一堂／蔵書」なるものもある。^{注7}両親については⑩に詳しいので次に引用する。

父を弥右衛門といふ。弥右衛門はもと同所(熱田)木挽町紀伊国屋喜平治が長子なりしが、橋屋弥右衛門^{仙葉が父の義父なりが代々同じ通称なり}が女深くこれを恋慕し、必贅婿にせん事を求む。故に其父これを喜平治に求む。喜平治、其長子を他の嗣とする事を欲せず、固辞すれども女これを求めて止ず。終に橋屋に贅婿となる。此頃、橋屋は質物を業とし大に富めり、仙葉が父弥右衛門は放蕩にて家産に心なし、俳諧を好み、俳名を呂川と云、諸国を遊歴す。ここに於て家漸く衰へたり。

④によれば、父は名を敬義、字を民則、号して小有軒呂川といひ、弘化三年秋執筆の『よしなし言』十二編に記された「自叙伝」によれば、二字帯刀を許された民戸百口の里正であった。先祖は『冬の日』の連中の一人蕉門羽笠である。^{注9}『東海の俳諧史』によれば、「姓高橋、通称橋屋弥右衛門、隠居して弥太郎、熱田中瀬町住、菩提寺は熱田白鳥の成福寺、享保十一年九月十七日没、享年八十三」とある。戒名は清月浮光信士(成福寺過去帳)。⑩にはまた仙葉の叔父についても記述があるので次に引用しておく。

仙葉叔父^{即ち父弥右衛門が弟也}二人あり、仲は喜平治、紀伊国屋に嗣たり、俳諧を好み、俳名を金樵といふ。季は喜兵衛、画を玉僊に学び、玉秀と号す。

玉僊とは『尾張名所図会』の挿画も手がけた森高雅のことで、仙葉も後その門下となる(後述)。

文化七年 庚午 七歳
○春 花の句を詠む。

「自叙伝」による。伯母の父大巢の家で詠んでおり、その場には大鶴庵竹有や叔父金樵等の俳人達が集まっていた。なおこれ

以後俳諧をせずと「自叙伝」にはあるが、天保十二年二月より執筆の『よしなし言』九編において、伊勢物語の和歌を発句に詠みかえたりなどしているから、このことについては俳諧には力を入れなかったというほどの意味であろう。

▲秋 手跡を「かよい手本」で磯部右近政春に学ぶ。

「自叙伝」による。かよい手本とは家にあつて手本をとる方法をいい、磯部右近は冷泉為泰卿門下の神官である。

▲是頃 家運傾きはじめる。

「自叙伝」には次の如く記されている。

おもへば七八歳より十余歳、家運すでに傾きたる時なれども、外見にかはりなし、屋敷八百歩の地を塞げ、倉廩小大十に及ばんとす、後園は竹林かけて四五百歩、僮僕六七人、婢女二三人、□□耕夫両三人、必家門出入して糊口す、竈十一二基、井両三所、厠も又五六所、上に双親老祖母有、寄食のもの又一両輩云々

文化八年 辛未 八歳

▲是頃 草双紙や読本を読みはじめる。

「自叙伝」に「くさざうしよみ本は八九才よりよみて」とある。

文化十年 癸酉 十歳

▲是頃 雛子や謡の類を磯部右近政春に学ぶ。

「自叙伝」による。

文化十二年 乙亥 十二歳

▲夏 和歌や素読を磯部右近政春に学ぶ。

「自叙伝」に「此政春ぬしに十二才の夏より三十一字をまなぶ四書五經古文唐詩選蒙求左伝等は皆此人に素読をまなべり」とある。

▲是頃 画を好みはじめ、やがて森高雅の門人となる。

「自叙伝」による。「十二三より画も又自このみてかく(中略)つひに浮世絵ををちの喜兵衛玉秀といへるにすゝめられ森高雅

翁いまだ玉僊たりしころより従ひてまな」ぶ。

文化十三年 丙子 十三歳

▲是頃 手代より暮を教えらるる。

「自叙伝」に「暮は十三四才の頃手代どもにをしへられいつもかつてはよろこびしをかし」とある。

文政元年 戊寅 十五歳

▲正月二十一日 母没。享年不明。これを機に父隠居し、仙果橘屋を嗣ぐ。

「自叙伝」に「十五歳にして妣君に別れ、嚴父退隠して予簞裘をつぐ千数金の借財贖ひがたし」とあり、成福寺過去帳によれば、右年月日に「橘屋弥右衛門母」が没している。戒名は蘭室春馨大姉。

○是頃 著作の念きざす。

「自叙伝」に「十五六のころ頻りに著作の念きざし」とある。

文政二年 己卯 十六歳

▲○春 磯部右近政春に伴われて初めて伊勢へ旅行し、この時紀行文と膝栗毛の類三冊、また二、三部の滑稽本を書く。

「自叙伝」による。

文政八年 乙酉 二十二歳

◎正月 最初の出版物である狂詩文『泥鵬台文集』一冊刊。

刊記「文政八年酉正月吉日 尾張書林 名古屋永安寺町菱屋金兵衛同本町九丁目菱屋久兵衛」「文政七年十一月良辰 風嶺陳李琳」自序。巻末で本書統編を「厚田仙菓輯」として広告していることにより本書は仙果作。

○十月十二日 文集『題作文稿』一冊を編んで序を記す。

「文政やとせといふ年の十月の十余二日のひ 仙菓堂主人」序。巻末には「文政六年正月 桃の舎蔵書」とある。文政五年秋から同八年までに行われた文会（文章作製を目的とする同好会）における会員の文章を集めたもの。会員を次に記す。鈴木離屋朗、

森醉月園喜蔭、鏡味桐屋貞厚、長岡弓含豊足、佐藤神園重水又筆屋、八絃、貝谷靖菴良金、森田松雄師二義名、多頼、高橋桃舎初名次房、広道、栗田栗生千壘の九

人。このうち鈴木離屋朗は「自伝歌」にも「学鈴木」とある。仙果の国学の師（入門の時期不明）で、本書には文政六年四月十三日の文会における「子目」と題する一文が載せられている。

また佐藤神園八絃は名を友直といって仙果の親友であり、『へだてぬ中の日記』や『ふしまちの日記』にも登場する（後述）。

▲是頃 家産の十分の九を減じ、ついに杜門する。

「自叙伝」による。「十六七歳より二十余才に及び十分の九を減じ終に杜門」とあって、その後家を他人に貸し自らは別に簡素な古宅を借りた（年代不明）が、再び旧宅に戻った時（年代不明）は、家と五、六丁歩の閑地を残すほか倉庫をはじめすべて人手に渡っていた。こうした中で親族特に分家（成福寺過去帳を見るに高橋弥兵衛と称した家であろう）は冷淡であったよううで、「年々に零落して親族皆不顧、分家の主人弥々吝嗇又人情なし、人の仆るゝを見てさらにかへりみず」と記している。

文政九年 丙戌 二十三歳

○四月下旬 雜著『おし花』初編一冊執筆。

表紙に「文政九年四月下旬」と墨書されている。二編には年代の記載なし。内容は小説演劇俳諧等を抜書きしたもの。

○十月 漢詩文『離屋先生文抄』（六卷二冊）の巻一を記す。

巻末に「文政九歲初冬」とある。国学の師鈴木離屋朗の文章を集めたもの。巻二には年代の記載なし。

文政十年 丁亥 二十四歳

○三月 同右書巻三を記す。

巻末に「文政十歲晚春」とある。

◎春 絵本『月附画艸紙』一冊刊

自画。末に「丁亥春仙果画」とある。版元不明。

○六月一日 漢詩文『離屋先生文抄』巻四を記す。

巻末に「文政十年六月一日」とある。

○六月二日 同右書巻五を記す。

巻末に「文政十年六月二日」とある。巻六には年代の記載なし。

○十二月 風俗『民農作稼益』一冊を記す。

表紙には「御歟祭評判記」ともあって「戊子初春」と記されているが、本文末には「文政十年季冬」とある。見返しに「厚田高橋香果屋藏書」と墨書。

○是歳 雑著『よしなし言』二編一冊執筆。

表紙に「文政十年」と墨書。初編は所在不明であるが、『柳糸屑』に「よしなし言初編一冊」について、「是は仙果が漫筆にて、さらに道理にかなひがたきを尤らしくこちつけたる物語百ヶ条づゝ一篇とす、読て益なきものながらおわらひ草にはなりもすべし」と記されている。

◎是頃 戯文『はりぬき富士』を出版するか。また咄本『新板へひり話』一冊が刊行されたのは是頃か。

前者未見。是歳刊黄花狂士作森川高国画『妹背之門松』（版元不明）巻末に「廓文章はりぬき富士 笠亭仙果作森川高国画」と広告。後者は原本未見であるが、『絵入江戸小咄』に翻刻影印されており、画工が同一人であることや名古屋での出版と思われることから是頃の刊行であろうか。「はりその秋津」（本居内遠）序。「作者蓬萊嶋仙果」「厚田笠亭仙果作」とあって、表紙によれば一名「へこきの開山飄百ものかたり」。版元不明。

文政十一年 戊子 二十五歳

▲二月頃 南部新五左衛門の娘と結婚する。

「自叙伝」による。新五左衛門には二人の娘があつて、仙果は美人の妹に恋するが、祖母の目になつた姉を妻とする。南部新五左衛門は天保十三年の仙果三度目の江戸行きの時、熱田宿問屋年寄として旅先の便宜を計っている（後述）。

▲三月 森高雅と京嵐山へ花見に行く。

「自叙伝」に「廿五才の二月はじめて此道（色の道）を味ひ三月高雅翁と同道し嵐山の花見にまかりて」とある。

○六月 是時までに雑著『おし花』三編一冊を記す。

見返しに「文政十より十一六月迄」と墨書。四編には年代の記載なし。

▲八月晦日 親友佐藤友直と京都に旅行する。

この時の紀行文『へだてぬ中の日記』による。同書についてはすでに中村幸彦氏と森銃三氏が紹介されているので、ここでは旅行の概略のみを以下に記しておく。九月四日京都に入り「おもひきや都大路の大橋をとしにふたゝびわたりみんとは」と詠む。（「ふたたび」とは是歳三月の嵐山花見旅行を踏まえる）。

御幸町まなばしや平助方にて宿。五日米屋庄兵衛方の玉堂を訪ねる。六日御幸町三条上ルに在る尾張出身の狂歌師蘆辺田鶴丸を訪ね榛園秋津（本居内遠）の書を渡す。八日尾張の画家中林竹洞を訪ねるが帰国中で会えず。この日田鶴丸の家に移る。十日大津の四の宮神事に赴く。十二日稲田嘉門を訪ねて『離屋字訓』を贈る。富小路の近江屋義兵衛方に移る。田鶴丸は十四日に帰国する。十三日竹洞に会う。帰国する田鶴丸に家への手紙をたくす。十五日建仁寺夷社の宵宮祭を楽しむ。十六日ものまなばしやに移る。十八日能役者とともに御所へ行く。二十一日高松中納言公祐の歌道の門に入る。東寺へ行く。二十二日一条の小川東へ入ル書商人・狂詩作家大文字屋愚仏を訪ねるが病の床に就いていた。加茂社に参詣する。二十九日本居宣長の忌日に当り、錦新町東へ入ル城戸千楯家の歌会に行く。十月五日再び愚仏を訪ねるが二日に没していた。七日京を立て帰途に着く。

○十二月十七日 紀行文『へだてぬ中の日記』（四巻一冊）巻一を記し終える。巻末に「文政十一年季冬十七日」の日付がある。

書名は本文中の佐藤友直の歌「もろともにけふたち出る旅衣心へだてぬ中ぞ嬉しき」による。巻二には年代の記載なし。

○是歳 雑著『よしなし言』三編一冊執筆。

表紙に「文政十一」と墨書。

文政十二年 己丑 二十六歳

○二月十日 紀行文『へだてぬ中の日記』巻三を記し終える。

巻末に「うしの二月十日」とある。

○二月十三日 同右書を全巻記し終える。

本文末に「文政十二年きさらきの十三日の夜此日記かきはてゝよめる」として歌二首を記す。

○五月 雑著『よしなし言』四編一冊執筆。

表紙に「文政十二年五月」と墨書。

○六月 雑著『よしなし言』五編一冊執筆。

表紙に「文政十二年六月」と墨書。

○九月 同右書六編一冊執筆。

表紙に「文政己丑九月」と墨書。

※十月三日 柳亭種彦熱田の仙果に書状を送る。

平出順益の『代睡漫抄』七冊目に「文政十二年十月三日ノ書」

「戯作の文を論ずる条」として抜書きされている。種彦門人となつたのは是頃か。

※十月二十八日 柳亭種彦熱田の仙果に書状を送る。

『代睡漫抄』に右書簡に続けて「十月廿八日文」として抜書きされている。

○十一月 雑著『よしなし言』七編一冊執筆。

表紙に「文政二十一年」と墨書。

天保元年 庚寅 二十七歳

※三月十九日 柳亭種彦熱田の仙果に書状を送る。

『代睡漫抄』に「文政十三年^(天保)三月十九日の文」として抜書きされている。

※閏三月十二日 柳亭種彦熱田の仙果に書状を送る。

『代睡漫抄』に右書簡に続けて「閏三月十二日」として抜書きされている。

○是月 雑著『よしなし言』八編一冊執筆。

表紙に「文政十三閏三月」と墨書。

※四月二十三日 柳亭種彦熱田の仙果に書状を送る。

『代睡漫抄』に前述書簡に続けて「四月廿三日文」「種彦草加あたりへ遊びし事をいふ文」として抜書きされている。

▲○是月 ぬけ参りが流行して仙果も伊勢参宮に行き、その時滑稽本『ふるまひ茶話聞書』一冊を記す。

是歳秋に刊行された『同行百人一宿大土佐草』はぬけ参りの流行に乗じて出版された滑稽本であるが、国会図書館所蔵の稿本に「もつとも私夏のはじめ、御参宮いたしたところ、折ふし宮川水が出まして、逗留、そのをりのむだ書を、其まゝ御覧に入るのでムリ升」とある。『ふるまひ茶話聞書』もぬけ参りの流行に乗じた戯作で、見返しに「文政庚寅初夏 厚田笠亭仙果作」とあり、「文政十三年夏 厚田仙果」序。巻末「後編目録」で「御蔭隨筆 中本二冊 来ル月出来」と予告。

※五月十三日 柳亭種彦熱田の仙果に書状を送る。

『代睡漫抄』に前述書簡に続けて「五月十三日の文」として抜書きされている。

◎秋 ぬけ参りの流行に乗じた滑稽本『同行百人一宿大土佐草』一冊刊。

大坂屋藤助板と名古屋の菱屋久八郎こと万巻堂本屋久八板の二種があり、見返しに「とらあきしんはん」とある。久八板巻末には「万巻堂新彫蔵板目録」として

大土佐草
余 興お蔭年代記 両面摺一枚

蝙蝠考 小本一冊

近日売出し申候御求可被下候

文政十三年

寅十一月吉日 本屋久八梓行

と記されている。なお本書には国会図書館と岩瀬文庫にそれぞれ自筆稿本があり、国会本には「御蔭参戯作目録」として次の如くある。

ふるまひ茶嘶聞書

二冊 出来

同後編

二冊

抜参おかめの目かづら

一冊 出来

同行百人一宿大土佐草

一冊 出来

文政ぬけ参夢物語

一冊

御蔭随筆

二冊

ぬけまゐり紅葉の敷御座

一冊

御蔭白猿賈詞

一枚摺 出来

また国会図書館には大野屋惣八の貸本用の写本も所蔵されており、その巻末で「ふるまひ茶話聞書後編」と「お蔭随筆二冊」を「文政十三年庚寅仲夏出来」と広告する。さらに「寛政中本物語 初編三冊」を仙果画作として広告する。

○十二月十一日 索引『書記類語』五冊を記す。

奥に「文政十三年十二月十一日分類了」とあって、「右書記類語以瓢菴廬所蔵柁園張立本写之但所々有次序不同者皆余所改也 峯維乙卯季春中旬於彼瓢菴廬兒女学字楼写之畢原書不得無誤脱加之有新写之錯謬未經一校引用之時則必検紀文而可 轍斎高橋広道」とある。

○是月 雜著『おし花』九編一冊執筆。

表紙に「文政三十三年二月」と墨書。

▲是頃 画を学ぶのをやめたのは是頃か。「自叙伝」によれば、「森高雅翁いまだ玉僊たりしころより従ひてまなぶども又よくかきえずそれまで二十四五ばかりにて廃す」とあるが、是歳二十七歳で刊行した『同行百人一宿大土佐草』久八板の予告する

『蝙蝠考』は、翌年春に自画として出版されており（後述）、以後自画の刊行物が見当たらない。

天保二年 辛卯 二十八歳

◎正月 合巻『合物端歌弾初』と人情本『清談常盤色香』三巻四冊を刊行し、柳亭種彦門人として江戸戯作界に登場する。

前者は前帙下に「辛卯孟春」とあり、柳亭種彦校、「文政十四年新彫 全部八冊初集四本柳亭主人種彦」序。前帙国貞画後帙国安画。仙鶴堂鶴屋喜右衛門板。後帙巻頭において柳亭門人としてデビューした口上を述べる。後者は刊記は文政十四年卯孟春

西村 与八

東武 丁子屋平兵衛

大坂屋半蔵

尾陽 美濃屋清七

三都書房 河内屋茂兵衛

浪速 河内屋長兵衛

皇都 秋田屋市五郎

山城屋佐兵衛

第一冊目見返し広告の板外「板元 山城屋佐兵衛」。本文の前に「この草紙を応て」と題する東籬亭人の狂歌一首を載せる。各巻頭に一名「本朝奈何天」「江戸柳亭種彦聞 厚田笠亭仙果戯作」と刻す。なお前者の種彦の序文に「どんぶらこ」と流れたる桃が好として仙果と名のり鬼が島なる宝物かくれ衰笠その字をとつて又笠亭とも号せり」とあるが戯れであらう。『戯作者小伝』に次の如くある。

笠亭の号は清人李笠翁が情性を欽慕ひ又師翁（種彦）が亭号の通音をとれり又仙果と名告る縁は予十歳ばかりの比熱田神宮寺住侶金幢法師余を愛して大なる桃一顆を贈らる高さ三寸圍六寸余にして宝珠の勢に似たり崑崙山の種なりといふ古人

早越に雨を得大に喜びて亭号とせり則其に做ひて云爾といへり^{注12}

これによれば笠亭のよみも「リュウタイ」ということになり、右種彦序文においても、また大惣本『同行百人一宿大佐草』においても「りふてい」のルビがある。

▲二月二十六日 佐藤友直八絃と連れ立って名古屋の花見に出かける。

『笠亭仙果文集』所収「天保二年二月廿六日記」による。

◎春 滑稽本『蝙蝠考』一冊刊。

「辛卯春興」「東都柳亭種彦門人 厚田仙果画作」「文林堂万巻堂開板」とある。文林堂は菱屋金兵衛、万巻堂は菱屋久八郎で、ともに名古屋の書買である。種彦の校閲なし。

○四月十八日 木や七兵衛板『道外和田酒盛』一冊を写し校訂する。

奥に「天保二年四月中旬うつす」と朱書、その後に「十八日校卒」と墨書。

○八月二十一日 『世話鹿子』一冊を写す。

奥に「千時天保二年八月廿一日高力猿猴庵翁の蔵本をもてうつすいまだ不校合」と墨書。

○十一月二十三日 寛永版『八島道行』一冊を写す。

奥に「天保貳年辛卯十一月廿三日於病架伝写之卒原本ハ大坂島内楠里亭其楽求得て柳亭翁ニ進「ムシ」しみちのついでに借得て倉卒にうつす」と墨書。

○是月 雑著『おし花』十編一冊執筆。

表紙に「天保貳年十一月」と墨書。

▲是頃 娘が誕生したのは是頃か。

子供は娘が二人あり、後妻が天保十四年に没した（後述）時、姉が十余歳妹が三歳であったという（自叙伝）。先妻は天保十年に没している（後述）から、姉は先妻の子で妹は後妻の子

である。後妻没時姉が十三歳であったと仮定すると是歳の出生ということになる。

天保三年 壬辰 二十九歳

◎正月 合巻『国字水滸伝』^{注13}十編刊。

見返しに「千曾天保三年壬辰春正月」とある。柳亭種彦校合、厚田仙果補訳、「天保壬辰春 柳亭種彦序。国芳画。永寿堂西村屋与八板。本書九編までは山東京伝と柳亭種彦の訳。

○二月十二日 歌舞伎評判記『古今閑疑集垣下徒然草』一冊を写す。

識語「天保三年春二月十二日高橋仙果自ラウツス所右垣下徒然草一卷寛文十一年春二月刊行ト云々柳亭翁モ刊本ヲ得ズ写シテモタル二十八人ノ優童座像アリ予ハ略キテウツサズタゞ明ラカニミエタル定紋ノミシルシ本書ニハ姓名ナキヲコムニハ目印シニ姓名ヲシルシオク」。

○二月二十日 書目『種彦翁俳書文庫目』一冊を記す。

奥に「天保三載二月念日仙果書」とあり、その後名古屋の友人たちが転写している。すなわち天保七年九月二十七日風花翁雲阿（天竺花老人）写、文久三年二月二日七十六翁神谷三園写、同年四月六日六十四翁小寺玉晃写。

▲三月十九日 松尾千璫らと同道して初めて江戸へ行く。

この旅行の紀行文『ふしまちの日記』^{注14}によると、江戸の種彦から一度は江戸の様をも見よといわれて俄に思い立った。「道の友は御倉の官のつかさ人山本の某になん小川の千璫しひてたのむにより共につれゆかんとす」とある。千璫は姓を松尾といい、小寺玉晃、平出順益、雲阿らと耽古連を組織していた八天狗の一人である。出立の時、『へだてぬ中の日記』に見えていた佐藤友直が顔を出している。「夜出立べきに定たれば千璫はよひより来をり佐藤の八弦^{直友}れいのかたときさらぬ中なればとやかくいひて互にわかれがたし」とある。よほど親

しい間柄だったのであろう。二十八日江戸着。いつまで滞在したかは不明。

○三月 雑著『おし花』十一編一冊を記しはじめる。
表紙に「天保三年三月より」と墨書。

◎春 合巻『花街雀竹夜遊』前映刊。

見返しに「天保壬辰春」とある。柳亭種彦校合、「天保三年壬辰春 柳亭種彦」序。国貞画。仙鶴堂鶴屋喜右衛門板。

▲四月二十五日 江戸表で曲亭馬琴宅を訪ねるが会えず。

『馬琴日記』の右年月日の条に「過日（四月二十三日）、田鶴丸状中ニ申来候、尾州の人仙果来訪、面謁を乞ふ。右同断ニ付（日記の前文により、多用のため病氣に托したことという）、不逢。近日、又可参よし申述、帰去」とある。

○七月二十六日 『江戸節根元集』一冊を写す。

奥に「江戸節根元集一卷柳亭翁所藏也」「天保三年たつのあき文月廿六日 せんくわ」と朱書。

天保四年 癸巳 三十歳

◎正月 吉見種繁作合巻『改色団七島』に序文を送る。

「天保四年癸巳孟春 笠亭仙果」序。国芳画。永寿堂西村屋与八板。

◎春 合巻『国字水滸伝』十一、十二編、合巻『花街雀竹夜遊』後映、合巻『眩笠雨小春空癖』刊。

『国字水滸伝』十一編は袋に「天保四年巳春」とある。柳亭種彦校、厚田仙果訳、「天保癸巳孟陽 柳亭種彦」序。国芳画。松寿堂大黒屋平吉板。十二編も袋に「天保四年巳春」とある。柳亭種彦校、厚田仙果訳、「天保四年巳孟春新版 厚田仙果」序。国芳画。仙鶴堂鶴屋喜右衛門板。十三編は再び種彦訳。『竹夜遊』後映は「巳春新版」とあって、柳亭種彦校、「天保癸巳孟陽 柳亭種彦」序。国貞画。仙鶴堂鶴屋喜右衛門板。『小春空癖』は見返しに「天保四年癸巳春発版」とある。柳亭種彦校訂、「天保四

年癸巳春 柳亭種彦」序。国貞画。仙鶴堂鶴屋喜右衛門板。

○四月はじめ頃 雑著『おし花』十二編一冊を記しはじめる。

表紙には「天保四年四月より」とあるが、十三編が四月中旬執筆なので同月はじめ頃と考えたい。

○四月中旬 同右書十三編一冊執筆。

表紙に「天保四年四月中旬綴」と墨書。

○是月 雑著『よしなし言』五編一冊執筆。

表紙に「天保四巳孟夏」と墨書。この一冊には「自伝歌」が記されており、是頃の様子がいく分なりとも分ると思われるので次に引用しておく。

予戯れに小伝を落首に作りて云

弥太郎は苗字高橋名広道あざなは子由家名橋

国尾州所は熱田中瀬町東側にてあじな家なり

役庄屋業はあらひこ上絵書たの画もかく戯作代作

別号の笠亭仙果通りよし合一癡房まれによべども

古今堂千歌に倉鼠松羅居士あだなは手桃今の石磨

とかなかなろはひらがなでミかたかなちはひらがなでよせて

花押

定紋は丸に橘めじるしは三つよせたるヒロのかたかな

宗門は禪の曹洞旦那那寺成福寺にてまぎれなく候

いせの御師内宮泉館太夫熱田の御師は栗田左兵衛

学鈴木歌高松家画玉簪作は柳亭外に師もなし

見識のないがひとつの見識ぞ有の一字を本尊にして

好きなもの茶番に女論しやべり書籍旅行朝寝生皮

殺生と博打と烟草ふぐのほか森羅万象世に嫌のなし

一生のたちのひじき朝精進をり／＼不時のたちのものもあり

誕生は十月中の七日にて文化元年甲子のとし

或あざけて云、笠亭が大酒をせぬが瑕に玉

※九月十一日 国学の師本居大平没。享年七十八歳。

『国学者伝記集成』所収の「門人名簿」に「同（熱田）高橋弥太郎広道」とあって、鈴木朗について大平にも師事していたことを知る。入門の時期は右「自伝歌」に大平の名が見えぬから、四月以後この時までの間ということになるうか。

○十一月下旬 平出順益著小寺玉晁画戯文『乞児奇伝』に序を記す。

本書未刊。「天保四年癸巳霜月下旬 夏のころまでは 断峯山人」序。細野要斎の『涉狐雑抄』によれば断峯山人は仙果。なおまた「八太郎」の名で跋文も記している。本書についてはかつて翻刻紹介したが、名古屋の友人達が序跋を多く寄せている。◎○是歳 合巻『新八百屋青物献立』刊。また伊勢紀行の書『いしや物語』一冊を記す。

両書ともに未見。前者は『改訂日本小説書目年表』による。国安画。また『増補続青本年表』によれば柳亭種彦校。後者は『国書総目録』による。天保四松羅居士跋。荒木田久守を訪ねたことなどが記されているという。^{注16}

天保五年

甲午

三十一歳

○元日 雑著『おし花』十四編一冊執筆。

表紙に「天保五年元日」と墨書。

○正月七日 狂言本『伝奇三種』一冊を写す。

『けいせい浅間岳』『今源氏六十帖』『けいせい夫恋桜』を収む。『今源氏六十帖』の後に「天保五年甲午孟陬七日うつしおはる」とある。平出順益が仙八銭にて購入したものを転写したもの。

◎是月 合巻『油町製本菜種黄表紙』、合巻『千代見草調富貴組』刊。

前者「甲午孟陽発兌」とあって、柳亭種彦関、「天保五年甲午孟陬 笠亭仙果」序。貞秀画。仙鶴堂鶴屋喜右衛門板。後者「天保甲午孟春」とあって、柳亭種彦校、「天保甲午孟陽 柳亭種彦」

序。国安画。栄久堂山本屋平吉板。

○五月二十一日 雑著『おし花』十五編一冊執筆。

表紙に「天保五年夏臈月念一日綴」と墨書。十六編は所在不明。

○七月十四日 書目『柳亭翁著書目録』一冊を編み以後も加筆。

「天保五年甲午夷則旬四日 門人笠亭仙果」序。

▲九月一日 森高雅前津の藤雪楼にて書画会を開き、仙果も参加する。

^{注17} この時の番付による。「甲午九月朔日於前津藤雪楼開筵」「会主尾張森高雅」とある。高雅仙果の名のほかに叔父の下田玉秀、後述する花山亭堀田笑馬、『へだてぬ中の日記』に見えていた亀井玉堂、友人の小寺玉晁等その門人たちが名を連ねている。

尾張の国学者植松茂岳も一文を寄せない。

○十一月 雑著『よしなし言』六編一冊執筆。

表紙に「天保五黄鐘」と墨書。

◎是歳 人情本『梅香情史驚袖』三卷三冊刊。

所見本年代の記載がないので、刊年は『改訂日本小説書目年表』による。巻頭に「厚田笠亭仙果関」とある。自序。英泉画。板元不明。

天保六年 乙未 三十二歳

○正月 合巻『枕琴夢通路』刊。

下巻見返しに「天保六年乙未孟春発兌合巻」とある。柳亭種彦校、「天保六年乙未孟陬吉日 厚田笠亭仙果」序。貞秀画。仙鶴堂鶴屋喜右衛門板。

▲春 二度目の江戸旅行をする。江戸表で所謂潤筆料問題を起したのはこの時か。^{注18}

名古屋にいる花山亭笑馬の仲間がこの旅行の帰りを待ち受けて、『笠亭主人東海道中滑稽譚』なる咄本を刊行しているが、「天保六とせ未の初秋出向ひの惣連中にかはりて」とある笑馬の序

文に、「この春の東下りを送れる時」云々とある。天保八年春刊行の『一筋道雪眺望』序文が同六年四月に江戸表の仙鶴堂店先で記されていることと右花山亭の序文により、熱田へ戻ったのは四月から七月の間ということになる。潤筆料問題では師種彦と鶴屋仙鶴堂の相方に疎まれたことになっているので、種彦が校閲をした仙果著作の最後のものと、鶴屋板の仙果著作最後のものを考えてみたい。前者は天保六年正月序刊『枕琴夢通路』が最後で、後者は天保六年四月序同八年春刊『一筋道雪眺望』が最後である。この二つの合巻はともに天保六年の序であるが、後者にはもはや種彦の校閲がない。つまり天保六年正月から四月までの間に、種彦鶴屋相方から疎まれる何かをしたと考えられるのであり、それが潤筆料問題ではなかったろうか。

◎七月 花山亭笑馬撰咄本『笠亭主人待受二会東海道中滑稽譚』一冊を閲し跋を記す。

原本未見。『小嘶再度目見得』第一期第四冊所収の翻刻による。本文前に「花山亭笑馬撰笠亭仙果閣」とあり、「天保六とせ末の初秋出向ひの惣連中にかはりて 花山亭笑馬」序。英泉画。板元不明。名古屋にいる笑馬の仲間たちが東海道を江戸から帰ってくる仙果を出迎えて書いた咄本であるが、序跋によれば実際は木曾街道を通って帰っている。咄の作者は花川亭水馬、花楽亭乗馬、花洛亭双馬、二亭乗穂、花園小馬、好客亭須賀笠、浅紅楼仙雪、古詩庵大福、櫛廼屋花白、名茶園松蘿、翦燭斎髭叟、花王田佳丈、万楽亭諸居、喜四楼延広、荒毛舎馬埵、駅路駒業、貧道堂馬人、先春堂主人、筆硯舎馬蹄、模屋文彬。

天保七年 丙申 三十三歳

○正月 雑著『おし花』十七編一冊を記しはじめる。

表紙に「天保七年正月より」と墨書。十八編は所在不明。

◎春 合巻『花蔭賤之俳優』刊。

柳亭種彦校、「天保甲午秋脱稿 丙申春發行笠亭仙果」序。国虎画。永寿堂西村屋与八板。

○六月上旬 雑著『おし花』十九編一冊と雑著『よしなし言』七編一冊を記しはじめる。

両書ともに表紙に「天保七年六月上旬より」と墨書。

天保八年 丁酉 三十四歳

◎正月 通用亭徳成作合巻『敵鯉差身業物』を校合して序を送る。

見返しに「笠亭仙果校合」とあり、「天保八年丁酉春初発兌 笠亭仙果」序。国芳門人の三人、芳宗芳虎芳升画。仙鶴堂鶴屋喜右衛門板。

○二月末 戯文『柳糸屑』一冊を編んで序を記す。

「天保八年、きさらぎのす多つかた、此ひともの柳の糸に、力とすがる、小やなぎの帯地あつた人、うぐひすのぬふてふ、笠亭のあるじ」序。師種彦の手になる十五の報条を集めたもので、『田楽愚誌』を付す。本文前に「柳亭種彦先生作門人笠亭仙果輯」とある。『柳糸屑』二編、『柳下駄』、『よしなし言』初編を広告する。『よしなし言』初編については前述したので、他二部を次に引いておく。

柳糸屑二編 嗣出

引札にかざらず画賛そのほか興にじょうじての狂文など、上木せざりし文をあつめたり

柳下駄二冊 二編三編とも嗣出

此書は柳亭翁より仙果へおくられし書翰どものうち、戯作のしかた、物事の考証になるべきこと、をりに触ての戯筆など、種々かきぬきあつめたれば、おのづから随筆めいたる冊子とはなりぬ

▲是月以前天保四年四月以後 三世浅草庵黒川春村の狂歌の門に入る。

春村の『壺すみれ』（是歳二月序）に狂歌の血脈が記されてお

り、そこに「——守舎——春村——広道」とあることと、「自伝歌」に春村の名が見えていないことによる。

◎春 合巻『一筋道雪眺望』刊。

見返しに「丁酉春」とあって、「天保六年乙未四月油街仙鶴堂鋪面において 同八年丁酉孟陽発兌 熱田笠亭仙果」序。国芳画。仙鶴堂鶴屋喜右衛門板。本書より種彦の校閲なし。

※六月六日 国学の師鈴木朗没。享年七十四歳。

○九月上旬 雑著『よしなし言』八編一冊を記しはじめる。表紙に「天保八九月月上旬より」と墨書。

天保九年 戊戌 三十五歳

○二月 戯作『春の友鶴』（『遊女鑑』一輯）一冊を記す。

未見。市橋鐸氏「尾張名家自筆本目録」による。「天保九月如月新編、五峯老人情痴漫郎合作、仙果老人序、絵入。笠亭仙果の戯作。版下本か。内容は奈良みや熊二郎とまるいち屋鶴八のこんたを仕組んだもの」とある。

◎春 合巻『店三絃緒連弾』刊。

下巻見返しに「天保九戌戌春」とある。三亭春馬笠亭仙果合作、「千時天保戌戌新刊絵冊子 笠亭仙果三亭春馬」序。貞秀画。永寿堂西村屋与八板。

天保十年 己亥 三十六歳

◎正月 合巻『柳蔭古着新廓』刊。

見返しに「天保己亥孟春発兌」とあり、「天保十年己亥正月新鐫 笠亭仙果」序。貞秀画。栄久堂山本屋平吉板。

▲二月二十一日 外出のついでに花山亭笑馬の月次会に出席する。

「庭さくらのまき」（『笠亭仙果文集』所収）による。兼題は時期を逸しているが昨年より決めておいた「梅蕉風」。参会者は「はるき」「ひろよし」「東河（藤花）園の君」「百杯楼の主」等。

夜中の丑二つばかりの頃帰宅。

▲十一月一日 先妻没。享年不明。

成福寺過去帳によれば、右年月日に「中願弥太郎妻」が没している。戒名は玉巖貞林大姉。

天保十一年 庚子 三十七歳

○四月十五日 歌集『遊女百首』一冊を記す。

奥に次の如くある。

天保十一年四月十五日 高橋広道

浅草庵大人

とり／＼にいひしらすうけ給はり侍りぬさきにはいかゞ侍りけむこたひはこたひのころにまかせていと倉卒に点あへ侍りぬまことやかう花やきににたるひゝ春をもはゝかることな
く老はれの褒貶ともにけなくつゝましきしわさになむ侍るこは耳も目も老はうときを聞もらし見おとしたりととかめ給ふな

六月廿九日夜

春村

○十一月三日 友人六人と行つた薬師祭のことを『有情記事』二冊にまとめ序を記す。

「爾昔天保十一季歳次庚子冬十一月三日於雲外楼東廂 情癡居士」序。本文前に「情癡仙果筆記」とある。六人とは錦翠、松嶋、里川、静嘉、里鳥、桜松。初会十月十二日会主錦翠、二会目十五日会主松嶋、三会目十八日会主里川、四会目二十一日会主仙果、五会目二十四日会主静嘉、六会目二十五日会主桜松（下巻によれば里鳥）、七会目二十六日会主桜松。

天保十二年 辛丑 三十八歳

○二月 雑著『おし花』二十編一冊と雑著『よしなし言』九編一冊を記しはじめる。

両書とも表紙に「天保十二年きさらぎより」と墨書。前者二十編は所在不明。

◎▲是歳 合巻『世話俊寛島物語』と合巻『万年紙亀之聞書』刊。また後妻との間に娘誕生。

合巻二部ともに未見。『日本小説書目年表』による。前者国貞画後者貞秀画。娘は天保二年頃出生した長女の異母妹ということになる。後妻が天保十四に没した時三歳であった（「自叙伝」から、逆算すれば是歳の出生ということになる。

天保十三年 壬寅 三十九歳

▲三月八日 三度目の江戸下りをする。

この時の紀行文『おもひのまゝの日記補遺』による。同書はすでに翻刻されているので以下にその一端を記す。三月八日に、先妻の父南部新五左衛門が書いた宿々での人馬頼み状を持って熱田を立つ。書付における新五左衛門の肩書は「熱田宿 問屋年寄本陣兼」とある。十六日江戸に入る。十七日浅草庵春村宅にて「今夕はざしきにて先生予てゐるむら三人ねる」。二十日柳亭種彦方にて昼食。二十一日柳下亭種員と春馬に会う。二十二日「春鶯は加藤常仙（市ヶ谷に住む）の養子かれ春水が御咎めにあひしを掩はんとめとりあへず柳亭翁月下菊かきたる咎にて永塾居おほせつけられしといへりかたもなきいつはりごととなりけり今はじめぬ腹ぐるなり」。四月六日江戸を立つ。十七日帰宅。土産物記録の中には浅算庵筆の短冊や扇、三馬の歯磨きや白粉等が記されている。

※七月十九日 戯作の師柳亭種彦没。享年六十歳。

天保五年七月序『柳亭翁著書目録』の同日条には「嗚呼悲哉」とあって、戒名「芳寛院勇誓心禅居士」と「ちる物に定る秋の柳哉吾も秋六十帖をかぎりかな」という辞世が記されている。

○七月二十八日 遊女評判記『吉原源氏五十四君』一冊を写す。

奥書によれば種彦蔵本を転写したもので、「天保十三年壬寅七月念八日写了」とある。種彦はかつて談州楼にて一見した本の転写本を天保十年春に写し、同十一年八月二十四日に再び談州楼にてはじめの本と巡りあって誤脱を改めている。仙果はその訂正本を写したのである。

○八月 歌集『搦衣百首』一冊を記す。

未見。雑賀重良氏『尾三歌書年表』による。

◎是歳 合巻『美目与里卿紙』初編刊。

下巻見返しに「壬寅新刊」とある。自序。貞秀画。栄久堂山本屋平吉板。『戯作者考補遺』によれば、前年刊『万年紙亀之聞書』の改題再版という。

天保十四年 癸卯 四十歳

▲二月九日 祖母没。享年不明。

成福寺過去帳によれば、右年月日に「中瀬橋屋弥太郎祖母」が没している。戒名は本室貞心法尼。

○九月 雑著『おし花』二十二編一冊を記しはじめる。

表紙に「天保十四年九月より」と墨書。二十三から二十七編までは編数不明の一冊以外所在不明。

▲十二月二十四日 後妻没。享年不明。

成福寺過去帳によれば、右年月日に「中瀬橋屋弥太郎妻」が没している。戒名は宝山明珠大姉。「自叙伝」によれば、この時先妻の子十余歳、後妻の子三歳であり、姉は後一時親類に預けられ、妹は幼さのため養女に出している。

注1 「笠亭仙果の伝記考察」（熊本大学「国語国文学研究」昭48・2）及び「初代笠亭仙果―その著作活動―」（北海道大学「国語国文学研究」昭51・8）。

注2 小寺玉晃の『人物図会』や本文後述の『題作文稿』には「次房」とある。「政房」は誤りか。

注3 ④に「広通」とあるが、自筆本等に全く使用されていないので誤りであらう。

注4 ⑥には「亀之助」とあるが、水野清氏が筆写された鈴木朗の蔵書貸出帳に「橋屋亀三郎」とあるので誤りであらう。

注5 ⑧には「仙菓」とあり、自らも『題作文稿』等で「仙菓」と記している。初期にはこのようにも記したのであらう。

注6 仙果の戯作と思われる『誠忠義臣銘々伝』には「招祿翁」と記されている。

注7 岩瀬文庫所蔵の自筆本『狂言小舞譜』には印ではなく墨書されているが、同文庫所蔵の自筆本『有情記事』『八島道行』にはこの印がある。

注8 代々の通称を「孫右衛門」等と記す書があるが、成福寺過去帳を見ても明らかに誤りである。

注9 市橋鐸氏の御教示による。御礼申し上げる。

注10 中野三敏氏の御教示による。御礼申し上げます。

注11 中村幸彦氏「仙果『へたてぬ中の日記』抄―賢愚同袋(因)―」(『国語国文』昭17・11)及び森銃三氏「笠亭仙果のへたてぬ中の日記」(『ビブリア』昭34・10)。

注12 他に笠亭は先祖羽笠によったとも、また仙果は画の師玉僊にちなんだとも考えられる。

注13 鈴木重三氏より御所蔵本をお見せいただいた。御礼申し上げます。

注14 鈴木重三氏より御所蔵本をお見せいただいた。錦窠堂伊藤圭介所蔵本を穴戸文磨が転写したもので、書名の下に「はこやなぎの記の上くだりの巻」と墨書。

注15 『乞児奇伝』(翻刻)。(昭51・3『野田教授 退官記念 日本文学新見研究と資料』所収)。

注16 注11の中村幸彦氏論文。

注17 『江戸時代図誌』第十六卷(昭51・7)にその写真が収録されている。

注18 関根正直氏『小説史稿』や伊原青々園氏「寛政以来の小説家の性格」(『文章世界』明43・10)に詳しい。

注19 天保七年春に『花蔭賤之俳優』が種彦校として西村屋永寿堂から刊行されているが、脱稿が同五年秋である。

注20 翻刻本「覚え書」に「笠亭仙果が生国尾張熱田へ戻り再び江戸へ来るを出迎に笑馬の社中が作った」とあるは誤り。

注21 「ライブラリーあつた」四十四、四十五合併号(昭39・5)。熱田図書館で開かれた尾張名家自筆本展の陳列解説パンフレットである。

注22 「集古」壬申(昭7)一〜五号、癸酉(昭8)一、三、四号所収。
(昭54・1・10)